

新刊紹介

武内進一編『戦争と平和の間―紛争勃発後のアフリカと国際社会』

武内進一



アジア経済研究所
2008年

アフリカの紛争をいかに解決し、永続的平和を確立するかという問題は、今や国際社会にとって主要課題の一つである。しかし、この問題に対する取り組みは、残念ながら日本では、実践的にも研究面でも遅れている。本書は、アフリカの紛争と平和構築というテーマに正面から取り組んだ、共同研究会の成果である。

アフリカ紛争問題の今日的特質を

一言でいえば、国際社会の関与によって深刻な武力衝突は減少したものの、平和の確立に向けた道筋はなお不透明だということだ。一九九〇年代前半のルワンダやリベリアのような、想像を絶する暴力の激発こそ抑制されているが、永続的な平和が根付く確たる展望も持てない。この宙つりの状況を「戦争と平和の間」というタイトルで喻えた。

本書の中心的な問いは、紛争問題の解決や平和構築のためにどんな取り組みがなされているのか、その現状はいかなるもので、課題は何かという点にある。特に、国際社会の取り組みに焦点を合わせた。冷戦の終結以降、国際機関、地域機構、ドナー・コミュニティ、NGOなど、国際社会の多様なアクターがこの問題に積極的に関与するようになった。本書では、平和の確立に向けた多様な取り組みを紹介するとともに、フィールド調査の結果も利用しつつ、アフリカの現場で何が起きているかを踏み込んで分析した。

本書のもとになった共同研究会には、アフリカ地域研究の専門家と平和構築問題の専門家との双方に参加をお願いした。私たちの問題意識に照らせば、現地を知る地域研究者と政策の意味に通じた平和構築の専門家との突っ込んだ議論は不可欠だ。共同研究会では、時に白熱した討論が戦わされたが、その成果は本書にしっかり反映されている。

本書は、序章と三つの部から構成

される。武内進一が執筆した序章は、近年のアフリカにおける紛争とその解決にむけた取り組みを整理し、国際社会がアフリカの紛争解決に深く関与するようになった理由と、そこで逢着する困難について論じた。

第一部では、和平プロセスとそこでの多様な課題を取り上げた。第一章の篠田英朗論文は、スーダンの二つの和平プロセス（南部、ダルフル）について、国連の役割を中心に検討した。佐藤章論文は第二章で、和平台意の実施が大幅に遅れているコートディヴオワールを題材に、和平プロセスの膠着要因を分析する。第三章では武内氏が、コンゴ民主共和国で試みられた治安部門改革の失敗について検討した。山根達郎の手による第四章では、近年リベリアで二度実施されたDDR（武装解除・動員解除・社会統合）が比較される。第二部は、平和構築の重要な課題である制度構築を扱う。第五章では峯陽一が、南アとウガンダを比較して、正統性の高い政治体制を紛争終結後に創り上げるための方策とその課題を論じた。第六章では落合雄彦が、紛争後のシエラレオネにおける地方自治制度改革を歴史的文脈に位置づけて、今後を展望した。

第三部では、紛争後の国民和解に関連する三つの論文を配置した。望月康恵は第七章で、ルワンダ国際刑事裁判所とシエラレオネ特別裁判所という、国際社会が関与して設立された二つの国際法廷を比較し、現地

への影響について論じた。第八章では、ルワンダのローカルな裁判制度（ガチャチャ）が取り上げられ、一般の住民がジェノサイド罪の容疑者を裁くというこの制度が農村社会に与えるインパクトについて、武内氏が分析した。最後の第九章では、モザンビークでフィールド調査を続けてきた船田ハクラーセン・さやかが紛争後の農村社会変容を分析し、平和構築過程における分裂の深化という逆説的な現象を指摘している。

各章の記述から、平和に向けた努力が様々な困難に直面していることが見えてくる。戦争から平和への道のりは決して直線的に進まないし、時に逆行も観察される。本書では、まずもってその実態を解明し、教訓を導き出すことに主眼を置いた。アフリカに限った話ではないが、紛争問題は複雑で、簡単に解決策が導き出せるものではない。どのような平和構築政策が最善なのかも国によって異なる。この状況において重要なのは、これまでの経験を正確に跡づけ、そこから教訓を汲み取ることである。本書がアフリカの紛争と平和構築に関する研究の決定版だということではないが、実態分析が不十分な現状にあって、多様な経験の学びやよりよい実践に向けた議論の土台になるだろう。本書が触媒となって、この問題に関する議論が深まることを願っている。

（たけうち しんいち／アジア
経済研究所地域研究センター）

レファレンス

コーナー

日本人移民のあゆみー南米・ブラジル

加藤貞穂

南米への日本人の集団移民は、一八九九年のペルー移民に始まる。その後一九〇八年のブラジルへの第一回「笠戸丸」移民から増加を辿っていった。これに遡り、本格的な日本人の集団移民は一八八五年のハワイ王国への移民に始まった。以降北米への移民と続いたが、一九二四年に米国がいわゆる排日移民法を施行すると、大きな流れが北米から、農業分野での労働力を必要としていたブラジルを中心とする南米へと移っていった。

二〇〇八年に移民一〇〇周年を迎えたブラジルは、現在約二五〇万人といわれる日系人が住む世界最大の日系人居住国となっている。彼らは、多民族・多文化社会の同国で、様々な困難を経て、現在では農業はもとより、政治、経済など多様な分野で幅広く活躍している。

ここでは、ブラジルを含む南米諸国への日本人移民に関する基礎的資料と、一〇〇周年を機に多くの出版物が刊行されたブラジルの日系人と日系社会に関する資料のうち数点を紹介する。

国立国会図書館・憲政資料室所蔵

のコレクションに日系移民関係資料がある。中南米諸国等の日本人移民資料館や公文書館が所蔵する明治時代以来の関係資料をマイクロフィルム撮影したものや、現地の日系人からの寄贈資料などを収集し構築されたものである。現地発行の新聞、図書、雑誌、パンフレットなどの刊行物のほか、個人の日記や書簡、写真や協同組合などの文書類から成っており、南米の日系人が辿った歴史、当時の現地事情を多面的に知るうえで貴重な一次資料コレクションとなっている。

日本人移民に関する主要な文献・資料を集めて復刻したものに『日本移民資料集』（日本図書センター一九九一年）がある。そのうち南米編は、明治時代から第二次世界大戦前の刊行物を対象にしており、渡航案内書や個人の移民体験談から学術研究書など多様な文献・資料が収録されている。また別巻には収録資料の解説や、参考文献も取り上げられており、南米移民研究のための基礎資料集として有用である。ブラジルに関するものが主であるが、メキシコ、ペルー、アルゼンチン、ボリビア、その他の地域に関する資料も収録されている。

移民研究のための文献探索ツールとして最近編纂されたものに移民研究会編『日本の移民研究―動向と文献目録』（明石書店、二〇〇八年）がある。これは一九九四年に出版された前編（明治初期～一九九二年九

月）の続編（一九九二年一〇月～二〇〇五年）にあたる。第一部では、その後の日本人移民・日系人研究の動向と展望が論じられ、文献解題も付されている。第二部は、国内で刊行された文献と、日記や名簿などの一次史料を採録した文献目録となっている。

ブラジル日系人の一〇〇年の軌跡を写真と解説でわかりやすく伝える趣旨で、ブラジル日本移民史料館・ブラジル日本移民百周年記念協会百年史編纂委員会「目でみるブラジル日本移民の百年」（風響社、二〇〇八年）が刊行された。これはサンパウロの日本移民資料館が編纂を進める移民一〇〇年史の一冊にあたる。

外山脩著『ブラジル日系社会百年の水流―日本外に日本人とその子孫の歴史を創った先人たちの軌跡』（トッパン・プレス印刷出版、二〇〇六年）では、現地邦字紙サンパウロ新聞の元記者である著者が、独自の視点で日系人社会の歴史を描き出している。初期の植民事業や日系産業組合を軸とした日系人社会の盛衰、「勝ち組・負け組抗争」にみられる戦後の混乱した日系人社会の人間模様、ブラジルの経済情勢や出国国である日本との関係性の変化などを要因に変容する日系人社会を、聞き取り証言を交えて多様な側面から浮き彫りにしている。

日系人社会の歴史、変容を理解するには社会を構成する移住者の個人史や家族史からも多く知ることがで

きる。小野政子「ほか」著『わたしのブラジル移住史』（毎日新聞社、二〇〇七年）には、戦前・戦後にブラジルへ移住した六人の女性たちの体験が克明に綴られている。過酷な環境での農業労働や、僻地での生活条件などがありのままに記され、移住の歴史を女性たちの視点から窺い知ることができる。

一九八〇年代後半になると、ブラジルの経済的混乱を背景に日系人一世、二世が就労目的で来日するようになった。さらに一九九〇年の「出入国管理及び難民認定法」の改変以降日本への移住者が激増した。この流れはかつて日本からブラジルへ渡った人々になぞらえて「デカセギ」(dekasegi)と呼ばれ、現在日本に居住する日系ブラジル人は三〇万人以上にのぼる。梶田孝道・丹野清人・樋口直人著『顔の見えない定住化―日系ブラジル人と国家・市場・移民ネットワーク』（名古屋大学出版会、二〇〇五年）は、彼らがフレキシブルな労働力として日本の労働市場に定着しながらも、不規則な雇用形態から生活様式が規定されてしまい、地域社会で「顔の見える存在」となっていない状況を、国家・市場・移民ネットワークという三つの要素から解き明かそうとしている。著者は日本の入国管理政策と移民政策の不整合に見られる制度面の問題点についても指摘している。

（かとう まほ／アジア経済研究所図書館）